

# 11 ゼミ生による「私の教養観」

わき た よしゆき  
脇田 佳幸

教養学部文科三類 2 年

私が思うに「教養」とは、知や学問といった範囲に限定されることのない、一人の人間の生き方そのものの問題である。もちろん今まで言われてきた通り知識や好奇心は必要だと思うが、それだけでは不十分だろう。自分を客観視する能力や、歴史の流れの中でいまだのような時代に生きているのかを捉える力、自分の言葉で相手に想いを伝える表現力など全てを備えた人を「教養人」と呼びたい。実際にはそれら全てを備えた人はそういないのかもしれないが、少なくとも「そうになりたい」というベクトルを持って生きている人が、私にとっての「教養人」である。そのような「教養人」に出逢うたび、私は「この人生きてるなあ…」と心から感じ、自分もそうになりたいと強く想うのである。

今回の講演や冊子でもテーマとなっている「教養をどう身につけるか」という問題に関して言えば、「これで教養を身につけよう」と意気込んで何かを行ったことは無いし、そんな必要は無いと思う。自らの興味の赴くままに、本を読んだりアルバイトをしたり、大学での活動をしてみたりするうちに自然と「教養」というものはついてくるのではないだろうか。少なくともそういう考えで生活を送っている自身の一年間を振り返ると、一年前よりはほんの少しだけ「教養人」に近づけているのでは、と思うのである。

ただこれは全く個人的な意見であって、別の捉え方で「教養」を考える人もいるだろうし、そもそも「教養」なんかいらないと考える人もいるだろう。実際、他のメンバーの意見を読んでもらえればわかる通り、このメンバーの中でさえ考えが統一されていないのである。もちろん勉強不足・議論不足というのは承知の上だが、結局「教養」というのは各々の捉え方次第でどうにでも変わりうるものなのではないだろうか。普遍的な「教養」というものは無く、ただその人その人にとっての「教養」が有る。それならば、今回私たちが「教養」について考えたことも全くの見当違いということは無い。今日の講演やこの冊子が、そしてこれから継続されるであろう立花ゼミ教養班の活動が、誰かの「教養」に対するイメージに、少しでも刺激を与えることが出来たら、嬉しい。

ないとう たくま  
内藤 拓真

教養学部文科三類 1 年

ここ駒場で何を学んだらいいのであろうか。この問いかけに答えることこそ「教養って何だ？」を考えることに他ならない。

バッシュに考えるなら、その答えは履修の手引きの中に書いてある。東大という三ツ星レストランが広げるメニューに従い、バランスのとれた履修をする。必要最低単位表で提示された通りの割合で各分野の知を消化する。教養課程を通じて取得すべき単位がそのまま身につけるべき教養と同値なら話は早い。

だが、あくまでそれは、東大が私たちにどんな人材に育てて欲しいかであり、そこに私たちの主体性は存在しない。たとえそれがフルコースであっても、出されたものを漫然と食べて満足するようであってはならない。メニューなど読むものか、という気骨が学生にはあるべきだ。無論、ミシュランガイドだって読むべきではない。

メニューにはある程度の選択性があり、文理を超えた様々な知に触れられると言う。幅広い学問分野を味見できる、と。しかし、「食べたことがある」というのは果たして教養だろうか。否、そんな浅はかな経験を束ねて「教養」というラベルを貼ることはできない。もちろん、提供される料理は当代一流のシェフがこさえた最高級品なわけで、そこを批判するつもりはない（と言ってプレッシャーをかけてみる）。味わう側の問題だと思うのだ。

一流のレストランに毎日足を運ぶ一流の客として、私たち学生がとるべき姿勢とは。私は「見つけること、咀嚼し味わうこと、表現すること」だと思う。まずは、未知のものに興味を持つ。「教養がない」という批判の大抵は「常識がない」の換言だ。味わったことのないものには食欲になろう。そして出された料理を味わう。消化しやすいようによく噛み砕き、一つのスパイスも見逃さないように味を確かめながら、胃の腑に落とし込んでゆく。既存の表現によるバイアスを批判し、料理が私に与えるそのままの味を理解する。最後に、表現する。言葉にしなければ理解しているということも理解されない。甘いのか辛いのか、持ち得る限りの語彙を尽くし、他の誰でもない私の言葉で表現する。

教養とは、知識や常識ではなく、それらを咀嚼・消化し、自分のものとして使いこなせる、そんな力だと思う。そうしてこそ身につくものだと思う。

えんどう しゅん  
遠藤 駿

教養学部文科一類 1 年

この冊子は少し不思議な性格を有している。教養学部<sup>1</sup>に在学しながら教養のなんたるかも知らぬ1・2年生が、教養学部<sup>2</sup>に設けられた立花隆先生のゼミを隠れ蓑に、教養のひとかけらを必死に掴もうとする、その活動の一環として、教養について考えてみたものだからだ。

そして、私たちの企画は常に、「教養」という言葉に翻弄されてきた。Liberal Arts や Culture の訳語としての意味の混乱と、度重なる誤用・乱用の果てに、本来持っていたのであろう輪郭が霧散してしまったこの言葉をとらえ直そうという試みは困難を極めた。座談会でも学生・教官アンケートでも、インタビューでも、いたるところでこの言葉の意味・定義との格闘を繰り広げてきたのだ。

では、結局、教養とはどのようなものなのだろうか。幅広い知識では甘い気がする。人間的な成長ではずいぶん話はずれるだろう。「生きる力」の涵養だったらゆとり教育の使者みたいだ。

私は、この企画を通してのとりあえずの結論として、教養とは成長を志向する意志そのものなのではないか、と考えるようになった。

好奇心の赴くまま浩瀚なる書物に挑むもよし。人間的成長を望んでバイトに精を出すもよし。ゼミに入って同志と議論を重ねるもよし。とにかくすべてから何かを吸収することで、自らのマインドを広げていくことを不断に志向する。これこそが教養なのではないか。

もちろん一つ一つの言葉に定義を与えながら正確な議論を組み立てることはできないため、最終的には自らの経験やイメージによるところが大きくなってしまおうのだが、今の私は、少なくともこのように思っている。

そして、自分が興味をもった分野について徹底的に調べ、その分野における有識者や権威の方々にお話を伺い、同じような興味を持った仲間と議論を繰り返し、自分と異質の人間との接触を重ね深めながら、一つのものを形作っていく。今回私たちが行ったこのような活動にも、教養の一片は宿っていたのではないかと期待している。

# い て ひ 李 太喜

教養学部文科三類 1 年

東京大学に入学したての 4 月。僕は立花隆の主催する立花ゼミを覗いてみた。立花隆って聞いたことあるな。…「見聞伝」。なんだこれ。けど、自分で興味のあることを調べられるのか。なんか楽しそう。

これが僕の立花ゼミに入ったきっかけだ。

そして教養企画は始まった。教養ってなに？ 答えは見つからない。けど、自分の中で一つ、これじゃないかって思うものは見つけた。

教養って、「見聞伝」じゃないか！ って。

初め、漫然な知識が教養とどう違うのか、僕は分からなかった。だって、いろんな知識を広く知ることでもいいのか？ じゃ、雑学王は教養人として一番か？ って。

だけど、篠原先生とのインタビュー、NHK でのインタビュー、僕らの座談会。各々の場所で僕の考えは、揺らぎ、膨らみ、転がり落ちて。その過程で、自身で学ぶ姿勢というものに教養を強く感じるようになった。

そう言われれば高校までの教育に教養教育って感じたことはなかったし、授業で教えられるだけだった。だけど大学に入って、嫌な必修の授業を受けつつも、興味があった哲学の本を読み、あれこれ考えるようになった。自分が自分の意思で勉強を始めた。これって少なからず教養と関係あるんじゃないか。

ふんわりと、自分のなかの教養に関するイメージを呼び起こし、繋げてみる。すると見つかったのが「見聞伝」という言葉だった。

自分の興味の赴くままに見て、聞いて、それを伝える。もちろん、そのままただ伝えるだけじゃだめだ。見るとき、聞くとき、自分はどんな意見を持っていたらう。納得できないところもあるだろうし、物足りないところもあったかもしれない。そんな思いを込めて伝える。それは相手に。そして自分に。

そうやっているうちに、新たな知識に惹かれるかもしれない。衝撃的な出会いが、僕の今を変えるのかもしれない。そう、哲学から量子論に飛んだりして。

インタビューの中で僕は言っていた。「好きなこと勉強して、広い知識も得るなんて無理じゃないか。」って。その通りなのかもしれない。だけどそんなこと言って、もしそんな大切な発見に鈍くなるんじゃないやなあ、と今はそう思う。

今の結論として、この姿勢が教養なんじゃないかと思う。水面に広がる波紋のように、一つの興味が広がっていく。これは初め持っていた、知識の広さっていうイメージにも少しは繋がっているだろうし、今の自分にとってはすごく大事なことで、また欠けていることだ。

そんな「教養」、是非身に付けてみたい。

まるで自分のゼミを宣伝するみたいで恐縮だけど、自分の教養観に僕はこの言葉を挙げたい。

くぼた ふみあき  
窪田 史朗

教養学部理科一類 1 年

この企画に参加してから考える機会は何度もあったが、「教養とは何なのか」について、結局のところ確固とした意見を持つには至っていない。冒頭から答える気がなさそうだが、決してそんなことはないのだ。とは言え幾らなんでもお話にならないので、何とかこれから捻り出してみよう。

座談会の中では「教養は結局非明示的にしか（教養自体ではなく無教養しか）定義できない」というフレーズが出てくる。しかし普通に（？）考えれば、非 A が定義できるのなら、A の輪郭はかなり見えてくる。実のところ教養の定義はもっと曖昧模糊としたものではないか。つまり、無教養の定義すら困難だと言いたいのである。これは「教養」に限らず、よく 2 値に分けられる様々な性質は、実際には連続的で、どこかで上手く切り分けられるケースは寧ろ希であると感じている。例えば、異常と正常、知性があるない、などの間は、実際にはグレーゾーンで、そのどこに線を引くかは常に悩ましい問題であり、場合によっては線をきっちり引くこと自体が放棄（？）されている。例えば知的障害者と健常者の境界は非常に曖昧で、様々な症状の程度を並べて、人工的に区分を定義しているのが実態である。

この様な例でどう区分を定義するかといえば、提案と承認という形で、誰かの提案が多くの人に認められると、それが採用されるのである。

大分脱線しているがやっと戻ってきて、教養についても何らかの共通認識らしきものを抽出してみたい。とは言え以下述べることは結局「私が共通認識だと思っていること」でしかない。はなはだ怪しいが、これを「私の教養観」だと思っ欲しい。

まずは取り敢えず、教養と近い概念を挙げてみる。一番に思いつくのは「常識」である。常識なんて、これぞ「(誰かが) 共通認識だと思っていること」そのものの様な気がするが、強引に進む。まず第一に、常識がない人は教養についても「ない」と言われそうである。第二に、常識であっても教養でないもの、及びその逆がある。理系的偏見かもしれないが「文学作品を読む」と教養は結びつきそうだが、常識とはあまり結びつきそうにないし、「話題のドラマの主演の名前」は常識であっても、教養ではない気がする。常識の方が「日常」に密着している概念なのに対して、教養の方は「学問」に近い、とでも表現できようか。学問との関連で言えば、教養は歴史的には学問を学ぶ者の身に付けておくべきこととして成立したようであるし、「学がある」と「教養がある」もかなり近い使われ方をしているようにも感じる。

二番目に「知識」と比較してみよう。多くの場合、教養は何らかの知識体系であるかの様に扱われる。しかし只の知識と教養を分けるのは何だろうか。明らかに、知識の全てが教養とは言えない。例えば時刻表を暗記していても、それを教養とは言わないだろう。或いは自然対数の底を 1 万桁暗唱できる人をそれだけで教養のある人とは言わない。一方で語彙の多寡等は、全てではないが教養に含まれているようだ。つまり知識の実用性は必ずしも知識から教養を切り分ける基準ではないようである。ここでもやはり教養は常識と似

て、「他者との接触」に関わるものであるらしい。

さてここまで書いてきたことをまたも強引にまとめると、「教養」とは、「他者と学問的な会話をする上で必要な知識や技能の総体」と言った所か。なんだかよく分からない定義な上に、これだと「教養がある」という表現の使われ方に、はまり込んでいない気がする。しかも形だけは定義は出来ているが、これでは会話する相手毎に教養は姿を変えるわけで、なんだか結局最初の「教養って何なのか分からん」という所に戻ってきてしまったが、これも私の教養不足ということでお茶を濁したい。

やまもと りょう  
山本 遼

教養学部理科一類1年

「そもそも、教養って何だ？」と問うてみる。とりあえず、国語辞典を引いてみよう。

1 教育てること。「君の子として之を——して呉れ給え」〈木下尚江・良人の自白〉

2 ㊦ 学問、幅広い知識、精神の修養などを通して得られる創造的活力や心の豊かさ、物事に対する理解力。また、その手段としての学問・芸術・宗教などの精神活動。

㊧ 社会生活を営む上で必要な文化に関する広い知識。「高い——のある人」「——が深い」「——を積む」「一般——」  
『大辞泉』より

東大教養学部では、「幅広い教養」を身につけることを目的としたカリキュラムが組まれているらしい（これに憧れて東大を受験する高校生は少なくない）。ここで言われている「教養」とは、上の語義で言うと、(1)は措くとして2の㊦と㊧では、㊧にものすごく偏っている、という実感がある。ここ駒場でも、大学受験までと同様、学生を篩にかけるための試験がある。高い点数を叩き出すことを専らの安楽とする人がウヨウヨしている。短期間でそれを実現するためか、「暗記」中心のお勉強がしっかり流行っている。その先に何があるかは知らないが、世渡りのためには仕方がないらしい。

期待と現実の、このギャップの原因はどこにあるのか？ 上に挙げた語義に基づいて考えてみた。「精神的豊さを教える」などという技術はついぞ知らないし、あると言われたところで真っ先に疑ってしまうだろう。「社会生活」の成立が、人間の、互いに合意し合う（あるいは馴れ合う）という側面の表れだとするなら、「個性」はその反対と捉えられそう。第一に、「個性」は伝播することはあっても、伝授されるものではない、という印象がある。つまり、㊦をいくら求めたところで、(物理的な意味での)大学の環境や書物には㊧くらいしか出せない。㊦は自分で考え、獲得するものであり、他人に評価を仰げるものとは必ずしも言えない、というのが僕の考えである(書物にしても何にしても、思考の機会を与えることを主眼においているものならよいのだが)。

もう少しだけ具体的に見てみると、㊦に近そうなのは、どうも「趣味」と名のつくものではないかという気がしてきた。何に対しても、「これは好きだ(興味がある)が、あれは好きではない(興味がない)」という偏りが、一人ひとりを際立たせているのではないだろうか。そして、「分野」や「専門」は、自分の好きな対象を指し示す上で非常に便利な言葉で、逆に言うともそれ以上の深い意味が感じられない。「遊ぶも好きずき、学ぶも好きずき」。いったい、「偏らない」人って、どんな人なのだろう。